

農学研究科 研究グループ (ARG) 名称	<h1>はだか麦資源開発研究グループ</h1> <hr/> <h2>Research Group for Development of Hulless of Barley Resources</h2>
--------------------------------	--

組織			
構成員整理番号	氏名(年齢)	所属・職	主な研究テーマ
①	(代表者) 荒木 卓哉	社会連携推進機構・農学研究科・准教授	作物個体内の物質輸送動態に着目した物質生産の評価と栽培環境の改善
②	(構成員) 八丈野 孝	農学研究科・准教授	分子育種遺伝学及び植物病理学
③	垣原 登志子	農学研究科・講師	食品成分分析及び加工特性の評価
④	渡部 保夫	農学研究科・教授	はだか麦β-グルカンの利用促進、γアミノ酪酸富化食品の開発、酵素法を用いたリン脂質合成技術の開発
⑤	菅原 卓也	農学研究科・教授	食品成分の保健機能性評価
⑥	澤崎 達也	プロテオサイエンスセンター・教授	無細胞技術の開発と応用
⑦	野澤 彰	プロテオサイエンスセンター・講師	無細胞技術の応用と乾燥耐性メカニズム
(連携研究者)			
①	吉岡 藤治	農研機構・西日本農業研究センター四国研究拠点・上席研究員	はだか麦育種(用途別加工適性および高付加価値を有する安定多収裸麦品種の育成)
②	奥山 聡	松山大学薬学部・助教	脳血管性認知症におけるトコトリエノールの機能性評価
計 9 名			

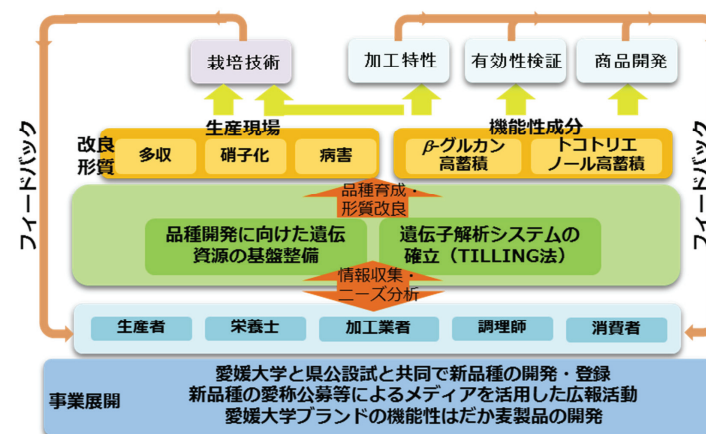
研究グループ名称	はだか麦資源開発研究グループ
代表者氏名	荒木 卓哉

〔設置目的〕

「輝く個性で地域を動かし世界とつながる大学」を掲げる愛媛大学としては、愛媛県の主力農作物であるはだか麦の生産振興と普及の拡大に資することは重要なミッションである。しかし、生産、加工および新規機能性開発等の各分野において多くの課題を抱えている。とくに、近年の健康志向と今後の超高齢社会の到来を考慮すると、新規機能性成分の探索や機能性成分高蓄積を目指した形質改良は、高付加価値はだか麦開発の新機軸として展開すべき課題である。そこで、本研究グループは、生産、植物病理、成分評価、加工および遺伝子解析の専門家で構成し、生産から消費までの各過程の課題や重要形質を綿密に把握すること、および課題や重要形質に対応した品種の開発に向けた新たな遺伝資源の基盤整備と遺伝子解析システムの構築を行うことを目的とする。また、松山大学、愛媛県の研究機関、愛媛県内企業と密接な連携を築き、はだか麦の生産、普及および超高齢社会において生活に潤いをもたらす研究拠点を形成する。

〔活動計画概要(概要をポンチ絵を用いて示した上で、簡潔に記載すること)〕

オール愛媛の魅力あるはだか麦づくり



- 3年間の研究期間ではだか麦の遺伝資源開発を推進させるために、
1. 生産振興及び実需者ニーズに応えるための情報収集・分析を行う。
 2. 品種開発の基礎となる遺伝資源の構築とTILLING法を用いた遺伝子解析システムを確立する。
 3. ニーズ分析の結果を踏まえた有望系統群を選抜する。
 4. 形質、食品加工、機能性成分の評価及び有効性を検討する。
- 上記4点の活動を通して競争的外部資金を獲得し、はだか麦の生産振興および普及に関する基礎および応用研究を推進するとともに、オール愛媛による魅力あるはだか麦を育成し、地域産業のイノベーションおよび地域志向人材の育成、ひいては健康的な体作りに寄与する。